

はじめてみよう!

# 予防型プログラム

## (講座・講習)

—地域子育て支援拠点職員が実施するための手引—

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会

# 予防型プログラム（講座・講習）

## — 地域子育て支援拠点職員が実施するための手引 —

地域子育て支援拠点は、乳幼児期の子育て家庭にもっとも身近な交流の場として、その重要性が増しています。

核家族化や少子化によって、以前のように幼い子どもを育てる様子を身近に感じて過ごすことが難しい時代です。インターネットの情報だけでは実際の子育てを体験的に学ぶことができません。

2020年（令和2年）4月から適用された改正児童福祉法、改正児童虐待防止法等により、児童相談所の機能強化や保護者による子どもへの体罰が禁止されました。本手引は、虐待や体罰をしている保護者の早期発見といった視点ではなく、地域子育て支援拠点において親子が安心して過ごす中で、親同士が子どもの育ちを分かち合い、子育ての関心ごとを共有し、交流を通して喜びや悩みを共感し合うことによって、主体的に養育イメージを学び獲得していく視点で作成した「予防型プログラム」実施のためのものです。特に地域子育て支援拠点基本4事業の、「講座・講習等の実施」に着目し、拠点特有の環境や機能を踏まえて、職員（スタッフ）誰もが企画・運営できるように「予防型プログラム」として実践モデルを提示しています。

地域において、孤立や子育て不安等を背景とした保護者のストレスが子どもに向かうことがないよう、追い詰められた子育てや体罰等によらない子育ての実現につながることを期待しています。

この手引が、皆様の拠点において具体的に活用され、子育て家庭の最善の利益に貢献できれば幸いです。

### 本手引における予防型プログラムの定義

参加者同士が子育ての関心ごとを共有し、交流を通して主体的に養育イメージを学び獲得していくことで、追い詰められた子育て等を予防することを目的とし、地域子育て支援拠点の職員（スタッフ）が、子育て家庭を対象に、拠点の基本4事業のうちの「講座・講習等の実施」を活用し、拠点特有の環境や機能を踏まえてグループワークを取り入れたプログラム。

本手引は、以下の内容で構成されています。

- ◆ 予防型プログラム企画のポイント・準備編
- ◆ 予防型プログラム実施編
- ◆ 予防型プログラム活用編
- ◆ 予防型プログラム展開編

地域子育て支援拠点における「プログラム」とは、一定の目的を達成するために支援者によって計画的に実施される活動を指します。

利用者のニーズを踏まえて実施することが求められますが、地域子育て支援拠点で実施される講座や講習は、専門職により行われるものが約8割、テーマは親子遊びに関するものが約9割を超える一方、多胎児・障害・ひとり親など個別に対応するテーマは、1割前後にとどまっていたという調査結果があります(※1)。

講義形式の(知識を得る)学習方法では、参加者は受け身になりやすく、個性的な思考が発揮しにくいと言われます。それに対してグループワークは、参加者同士が子育ての関心や交流を通して共感することによって、主体的に学ぶことができます。

本手引書では、日常的な親子の交流の場という拠点特有の環境や機能を踏まえ、利用者参加型のグループワークを中心とした「講座・講習等」の実施によって、親自身が主体的に参加し、他の参加者との相互作用の中で、自分なりの子育てを見出し肯定的な養育イメージを学び獲得していくことを目指しています。

## ● 実施のポイント

- ◆ 1人の悩みやつぶやきから始めてよい
- ◆ 安心して話せる場をつくる
- ◆ 多様な親子をジャッジしない場をつくる
- ◆ 親自身が自分を大切にできる場をつくる
- ◆ 子どもの育ちを分かち合える場をつくる
- ◆ スタッフが、ファシリテーターの役割を担う
- ◆ 「虐待」「体罰」といったネガティブな用語をプログラムにいれない
- ◆ 早期発見ではなく、予防型であることをスタッフ間で確認する
- ◆ スタッフ間で、子どもへの体罰は法律で禁止されていることを確認し、しつけと体罰の違いなどの共通理解をしておく

「体罰等によらない子育てのために  
～みんなで育児を支える社会に～」  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/taibatu.html>



## ● 目指したいポイント

- ◆ 主体性を尊重する
- ◆ 知識ではなく経験を重視する
- ◆ 情緒的なゆとりがもてる
- ◆ 子どもの個性を大切にする
- ◆ 親自身が自分なりの(自分らしい)養育力を身につけられる
- ◆ 親自身を取り巻く環境への意識がもてる
- ◆ 配偶者と共に子育てをする意識がもてる
- ◆ 他者に頼る力、お互いさまの分かち合い意識がもてる
- ◆ 将来展望がもてる

※1 平成28年度子ども・子育て支援推進調査研究事業  
「親子の交流の場の提供を中心とした地域子育て支援拠点事業の実践状況等に関する調査研究」  
学校法人関西学院 研究代表者 橋本真紀(関西学院大学教育学部教授)

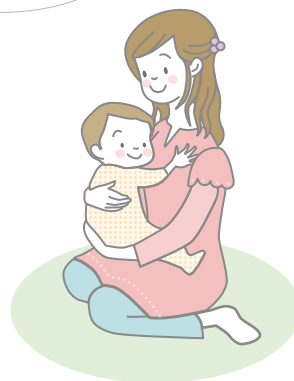
## ● グループワークを通して、参加者が得られる効果

- ◆ 自分だけではないという共感を得る  
→ 「私だけじゃなくて安心した」
- ◆ 他者の意見を聞くことで、自分の子育てを客観視できる  
→ 「固定観念にしばられていたかも!」
- ◆ 入手してきた知識や情報を体験的に理解することができる  
→ 「知識より体感、体験」「これが本質だった!」
- ◆ 多様な見方、意見を受容できる  
→ 「そんな考え方もできるのか」
- ◆ 助け合いに発展する  
→ 「私より大変そう、何か応援できないかな」  
「私も助けてもらおう」

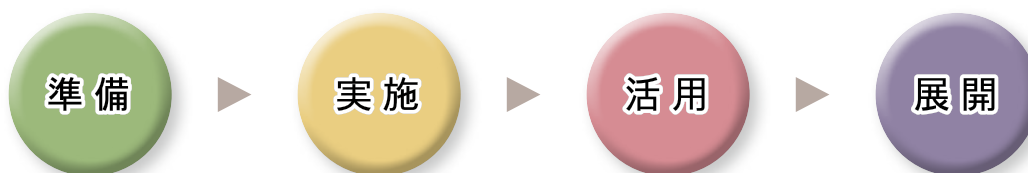
私だけじゃなくて  
安心した

固定観念に  
しばられていたかも

そんな考え方も  
できるのか



## ● 予防型プログラム実践の流れ



次のページからは、予防型プログラム実践の流れに沿った解説になります。

## 気軽に始めよう！

月に一回以上の実施が課されている講座について、「どんなテーマで、どう実施しようか」、「利用者や地域の方々に届くものにするにはどうしたらいいか」と、迷うこともあると思います。

また予算がない、人手が足りないなど悩みも多く、中身もマンネリ化してしまいがちなので、毎年同じ内容ではなく、もう少し工夫をしたいという声も寄せられています。

まずは気軽に、日頃から感じている親の困りごとを思い浮かべ、柔軟な発想で、フレキシブルに発動する小さなグループワークをイメージして実施してみましょう。



以下に「予防型プログラム 実践モデル」を紹介します。すぐに実施していただける内容となっています。はじめにアウトライン、次ページより項目ごとに詳しい説明を掲載しています。

## 予防型プログラム 実践モデル

1. テーマとねらい	テーマ：「夜泣き」どうしてますか ねらい：他の家庭の様子や対処法を聞く中で、自分だけではないという共感を得る。
2. 参加対象者	0歳から1歳の子どもを育てている保護者 6組程度
3. 実施時間	平日 10時30分から11時30分
4. 実施場所	拠点の〇〇コーナー 〇〇室
5. お知らせ	2週間ほど前から、拠点内にお知らせを掲示し、チラシを配布する。
6. 事前準備	簡単なタイムスケジュールと役割分担、備品用意、チラシ・アンケート作成等
7. スタッフの役割	スタッフは2名。進行役（ファシリテーター）と補助役（フォロワー）の役割を担う。 ※1人でも実施できます
8. 進行内容	① はじめの挨拶とグラドルールの確認（3分） ② アイスブレイクと自己紹介（10分） ③ 今日のテーマに一言（12分） ④ フリートーク（20分） ⑤ まとめ（10分） ⑥ 進行役からの一言と連絡（5分）

## 1. テーマとねらい

### (1) テーマ

予防型プログラムのテーマは、親の主体性を育み、自身の子育てを客観的にとらえやすくするという目的があります。

テーマを設定するに当たってのポイントは以下の通りです。

#### ①情報を集める

スタッフが日頃の活動の中で利用者から拾った「何気ない一言」「つぶやき」から企画できるのが地域子育て支援拠点の醍醐味です。

利用者自身の会話やスタッフとの何気ない日常会話、地域の様子や状況からスタッフ自身を感じ取っていることは大きなヒントになります。大事なのは、利用者の様子をじっくり観察し、対話し、日々のスタッフの振り返り、利用者の葛藤や困りごとをどうテーマに落とし込むかです。

#### ②わかりやすい内容にする

実践モデルにあるように「『夜泣き』どうしてますか」というタイトルであれば「そのテーマについては私も困っている」と感じていた方は参加しやすいでしょう。「離乳食」「睡眠」「イヤイヤ期」についてなど、乳幼児期によくある悩みをテーマに設定します。

### (2) ねらい

担当するスタッフは、参加する親が自分たち親子に備わる『成長する力』を信じ、子育て仲間や地域の支えを得て自信を高め、子どもに向き合う余裕を回復する過程を信じて、1対1の相談では得られない当事者同士の水平・対等な関係のグループワークを実施することで、期待できる成果を見通しながら具体的な「ねらい」を定めます。

実践モデルでは、ねらいを「他の家庭の様子や対処法を聞く中で、自分だけではないという共感を得る」としています。

具体的には、前述のP2・P3の「目指したいポイント」や「グループワークを通して、参加者が得られる効果」を参考にしてください。

ねらいは、実施する拠点のスタッフ間で共有するもので、プログラム参加者に伝えるものではありません。

## 2. 参加対象者

決めたテーマはどのような人たちが興味をもつのか、またどのような人に参加してほしいのかを考えると参加対象者の年齢、人数が自ずと決まってきます。保育をつける場合もあります。

グループワーク中心のプログラムであることから、お互いに話を聴き合えるくらいの参加人数を設定します。

## 3. 実施時間

テーマごとに参加対象者が異なるため、参加しやすい曜日、時間帯、時間、回数を考えます。利用者に、聞いてみるのもよいでしょう。

### ①曜日（平日・土日・休日）

対象者によっては参加しにくい曜日がないか配慮が必要です。就労家庭を意識して、平日と土日で同じ内容を実施するなどの工夫も必要です。

### ②時間帯（午前・午後）

子どもの昼寝や食事等の時間を考慮して決めます。

### ③時間

同席の子どもへの負担を考慮し、時間を決めます。子どもの年齢や保育の有無で時間が異なります。終了後、参加者に個別に声をかけることもありますので、会場の使用時間は余裕をもって準備してください。

### ④回数

要望の高いテーマは回数を増やす、学びを深めたいテーマのときは決まった参加者で回数を重ねるなど、テーマによって回数を決めます。（詳しくは「予防型プログラム活用編」で説明します。）

## 4. 実施場所

気楽に気軽に参加できるようにいつも利用している拠点で実施します。拠点内で、できるだけ親子が落ち着いて、心地よく話せる場所を選びます。

拠点内に別室がなく、プログラムに参加しない親子が遊んでいる同じフロアで実施する場合は、フロアの片隅などの落ち着く場所を選びます。感染症などが流行している時期には、場所を広めに確保します。

## 5. お知らせ

拠点内で、利用者に向けてプログラムの概要（テーマ、参加対象者、実施日、実施時間、実施場所、問い合わせ先等）を、お知らせします。

### ①チラシを作成して拠点内に掲示したり、利用者に配布をします。

### ②スタッフがさりげなく個別に声かけをしてお誘いします。

テーマに関心がありそうな利用者に対しては、「こんなプログラムがあります」と声かけするのもいいでしょう。

### ③実施日のおおむね 2 週間前～ 1 か月前にお知らせをはじめます。

年間行事のように早くから実施テーマ・日時を定めるものとは異なる位置付けです。

## 6. 事前準備

テーマや実施時間・場所が決まったら、場所の確保、必要なものの準備、大まかなタイムスケジュール等事前にわかっていることをスタッフ間で分担、共有します。

## 7. スタッフの役割

2人のスタッフで連携して実施します。1人は進行役（ファシリテーター）をつとめ、1人が補助役（フォロワー）を担います。

### ①進行役（ファシリテーター）の役割

- ◆ 全員が参加しやすいように配慮する
- ◆ 参加者の連帯を意識する
- ◆ 参加者が持っている知識や経験を引き出す
- ◆ 参加者自身が自分で考えるようサポートする
- ◆ 目的から外れないようサポートする
- ◆ ファシリテーターの個人的価値観を押し付けない、誘導しない
- ◆ 全体の進行を管理する
- ◆ 肯定的な評価と参加への感謝、今後への展望をまとめる

### ②進行役（ファシリテーター）の機能

- ◆ 「進行役」「聞き役」に徹する
- ◆ 参加者の発言を尊重する
- ◆ 参加者の発言を促す（〇〇さんから発言がありました、皆さんはいかがですか?）
- ◆ 参加者の考察を促す（こういう時はどうしたらいいでしょう。皆さんで、ちょっと考えてみてください。良いアイデアはありますか?）
- ◆ 要点をまとめ、フィードバックする（こういうことですか?）

スタッフは、支援職であるがゆえに助言・指導に偏る傾向があります。参加者から正解を教えてほしいと言われる場合も想定されます。しかしこのような場合、参加者が自ら考え試行錯誤することを避けて、スタッフに過度に依存してしまう場合も生じてきます。

利用者参加型グループワークでのスタッフの役割は、進行役（ファシリテーター）として、参加者が自分の力で悩みを克服していく“力”があると信じて、過程に寄り添い、見守ることです。

### ③補助役（フォロワー）の役割

フォロワーは、進行役を「フォロー」します。プログラムが始まると進行役は進行に徹しますので、イレギュラーなことが発生した場合は対応しにくくなります。フォロワーは全体を見渡し、参加者や進行役に困りごとはないかを見逃さず、全体がスムーズに進行するように動きます。

補助役（フォロワー）の役割については、例えば以下のような動きが必要とされます。

- ◆ 遅れてきた人に対応し、進行中のプログラムに素早くなじむように誘導する。
- ◆ 授乳やおむつ替えの場所を案内する、または子どもの世話をしながら参加できるように配慮する。
- ◆ 子どもが激しく泣いた場合等、「ちょっと廊下に出てあやしてみる?」など手助けをする。

業務の都合で2人で行えない場合は、1人で進行することも可能です。その際は、参加者にフォロワーの役割を手伝ってもらってもできます。開始前にあらかじめ説明し、お互いに困りごとがあったら参加者同士で助け合えるようにしておきます。

ファシリテーターとは、意見を述べたり指導する人ではなく、円滑に進行する手助けをする人で、縁の下の力持ち。あくまで主役は参加者です



## 8. 進行内容

### 場に迎え入れる

プログラムの開始前、参加者を会場に迎え入れる時から、「あたたかく迎え入れる」ことが大切です。いつも拠点を利用している人でも、プログラムへの参加にはまた別の緊張感や期待感があるかもしれません。初めての人に対してはもちろんのこと、利用し慣れている人であっても、改めてこの場に迎え入れるつもりで関わります。

荷物の置き方、どこに座ったらよいか、など、会場内での参加者の動きも丁寧に説明します。ホワイトボードなどにウェルカムメッセージとともに参加者がどうしたらいいかを書いておくのもよいでしょう。特にスタッフが1人で担当する場合には、このやり方は有効です。

以下、シナリオに沿って解説します。



## シナリオ ①

はじめの挨拶と  
グランドルール（約束ごと）の確認 3分

「迎え入れる」あいさつ

※細かな言い回しは参加者になじむ表現に変えてもかまいません。

- ▶ おはようございます（こんにちは）ようこそいらっしゃいました。はじめましての方も、あらためての方も、この時間を有意義な時間にしていきたく思います。

ぜひ仲間として一緒によい話し合いの場を作っていけたらと思います。

今日の進行役をつとめる〇〇と申します。

一緒に担当する△△です。時間内でも、遠慮なくいつでもお声かけくださいね。

これからの時間を、みなさんと一緒に作っていこうと思います。

自由にリラックスしてお過ごしください。ここで話されたことは、お互いにここだけとして、外には持ち出さないことにしたいと思います。

そのほうが、ご自身も安心してお話できる時間になるとと思います。お互いに尊重し、聴きあいましょう。

誰かの話を聴くときは「私は、あなたの発言を聞いていますよ!」というメッセージを、ぜひ発信してみてください。具体的には大きくうなずいたり、拍手したりすることです。笑顔も大事ですね。

話す人にとっては励まされ、支えられて、発言しやすくなる働きがあります。

子どもたちは自由に過ごさせてあげてください。

ほかの人のところへ行ってしまうこともあるかもしれませんが、それは親から離れて探索するすばらしい冒険心の表れなので、ぜひ尊重してあげてください。

この場にいるみんなで見守り、自分のところにきた子どもたちのことはケアして、他の子どもをみる経験として味わってみましょう。

子どもたちにとっても、親以外の大人との関わりあいは貴重な体験となると思います。

ここまで、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

## 解説①

大切な約束ごとやここでの過ごし方をお伝えするので、しっかり落ち着いた状態でお話します。

グランドルールという言葉を使って説明する必要はありませんが、参加者が安心して話をするできるよう、「ここで話されたことは外で話さない」という守秘義務のお願いを確実に伝えます。

グランドルール  
（約束ごと）

話し合いなどを行う際に設定するルール。スムーズに進行するため、ファシリテーターが事前に設定する場合や、参加者とともに決める場合があります。今回は実施時間が短いため、あらかじめ決めたことを伝える形式になっており、グループワークを行う際に最も大切である守秘義務について伝えています。

<例>

「意見を否定しないように  
しましょう」

「お互いの話をよく聞き  
ましょう」

「話したくないときはパス  
しても大丈夫です」

## アイスブレイク

集まった人を和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、積極的に関わってもらえるよう働きかける技術のこと。参加者の不安や緊張を氷に例え、その「硬い氷をこわす、溶かす」という意味を持ちます。

## シナリオ② アイスブレイクと自己紹介 10分

- ▶ ここで今日お集まりのみなさんと自己紹介をしたいと思います。お名前と、住んでいる地域など、そしてお子さんのお名前と月齢、あと、今日は「最近ハマっているストレス発散方法」をひとつご紹介ください。まずは私から見本がてら、自己紹介しますね。  
(進行役の自己紹介後)  
それでは、たまたま私のお隣になった〇〇さん、次をお願いしてよろしいですか？

### 解説②

自己紹介の際には、進行役が見本で話すときに長くならないように気をつけます。一人ひとりの発言のあとに進行役が率先して拍手をします。

名札は、事前に用意しておくこともできますが、簡易的にその場で養生テープなどに書いて、洋服に貼ってもらう方法もあります。名札ケースが抱っこ邪魔になる場合もあるので、テープでも充分です。早く来た人から順に名札をつくってもらうのもよいでしょう。

自己紹介のときのアイスブレイクがわりに発言してもらう内容は、その場に応じて決めるも構いません。子どもに関することでもいいのですが、参加者同士の関係性をつくっていくきっかけにもなるので、ご自身のことを話す時間にできるといいのではないかと思います。

<例>「大好きなお味噌汁の具は」

「1時間ぼっかりと自由になったら何をしますか」 などなど…

みなさんもたくさんストックしておくといいと思います。

## シナリオ③ 今日のテーマに一言 12分

まずは全員が2分で短く話す

- ▶ では早速ですが、今日のテーマ『夜泣き』どうしてですか？について、みなさんで話していきたいと思います。

今日このテーマに参加しようと思われたきっかけやエピソードなど、それぞれ2分でお話しくださいますか。ドキドキしながら参加してくださっている方もいると思いますが、ここでは安心してお互いに励ましあって話を聞いていきましょうね。もちろん、話したくないことは話さなくても大丈夫です。

どなたか、口火をきってくださいますか？全員が話ができるように、2分たったらアラーム<sup>※2</sup>が鳴るようにしておきますね。

ではどうぞ。

### 解説③

テーマについて前もってカードに書いておいて、読み上げてもらうということもできますが、お子さんがいる中での記入は難しいこともあります。

最初に話す人が決まらない場合は、初めに自己紹介した人の次の人からお願いするとスムーズです。出された内容は、シナリオ④で要約するので、メモをとったり付箋などに書きとめてどンドン貼ったりしておきます。

その後のフリートークのときに指し示して話題を変えていくこともできます。

※2 アラームについては使うかわないかは自由ですが、誰かが長く話してしまうことを防ぐことができます。

## シナリオ④ フリートーク 20分

- ▶ みなさんの気持ちやエピソードを伺って、それぞれまたお話ししたいなと思うことが出てきたのではないのでしょうか。ここからはフリートークで、お話ししていきたいと思います。皆さんのお話の中には、「〇〇〇」（複数の人が語ったことなどを一つ二つ要約する。時間が無いので全部を復唱しない。）などがありました。まずは「〇〇〇」から話してみましようか。

### 解説④

結論を出す場ではありませんし、何が正解で何が間違っているかを正す場でもありません。様々なやり方や受け止め方があるということを確認します。

まずは「よく発言してくださいました」という姿勢で、一人ひとりの発言を受け止めていくと良いでしょう。

発言を、ホワイトボードや模造紙に付箋などで書き留めていく方法も有効です。

子どもが傍らにいて聞き逃した時や遅れて参加した人にとっても、他の人の意見を目で確認できますし、今まではどんな意見が出たかを振り返りながら自分の体験や意見を語る助けになります。

書き留める場合は、一人ひとりの発言を平等に扱います。どんな発言でも大切に扱われたという経験により、他の誰かの発言も大事にし、互いに聴きあう場の空気をつくれます。

### ピアサポートを活用しよう！

地域子育て支援拠点の交流の場の機能によって生まれる、利用者同士のお互いさまの支えあいといった相互支援を「ピアサポート」と呼びます。

専門的な支援も大事ですが、利用者同士のピアサポートを高め、子どもたちの育ちあいの姿をプログラムに生かせるのも、拠点の強みです。利用者も参画し、役割を感じられる企画に発展させていければ、拠点の企画にとどまらず、地域の資源にもなり得るものです。

「同じ気持ちの人に出会えた」、「私ひとりが感じている悩みではなかった」と捉えられるようになることは、プログラムの参加者にとっても「この状況を引き起こしているのは自分が悪いからだ」といった悪循環に陥らずにすみ、結果的に、孤立を防ぎ、虐待の発生予防にもつながります。

進行役の役割は、このピアサポートを上手く引き出し、活用することが大切です！

## 困った反応？

参加者が突然泣き出すなど感情の揺れに接すると、進行役として何か至らなかったからかと心配になってしまうかもしれませんが、その場が安心して語れる場であったために感情が表現されたとも考えられます。

話してくれてありがたいと受け止め、その人を尊重する視点をもって進行していきます。

誰かが感情を表したことがきっかけで他の人も話やすくなることもあります。

## 体罰によらない子育てのために

「もちろん体罰はいけないが自分は『しつけ』をしているだけだ」と考えている人もいるかもしれません。よくないとわかっていても様々な理由や置かれた状況で難しい場合もあるかもしれません。

保護者だけで抱え込まないように、拠点での支援や、関係機関と連携して支えていくことが必要です。(2ページ参照)

## こんな時はどうする？

### どうしても正解や結論を知りたいという人がいた場合

- ▶ なるほど。もしかしたら同じような経験をした方がこの中にいらっしゃるかもしれませんね。その人はどうしたのかを聞いてみませんか。

### テーマから話が逸れた場合

- ▶ そのテーマもじっくりしたいですね。今日は深掘りできませんが、ぜひ今度そのテーマでも話し合しましょう。

### 突然泣き出してしまった方や、途方に暮れてしまった方がいた場合

- ▶ 泣くのも大事なことの働きですから、泣いていただいて大丈夫ですよ。大切なことを考えるとなかなか言葉にはなりませんね。お話するのはもう少し後になりますか。

### 自分のつらい過去を語った参加者がいた場合

- ▶ お話くださってありがとうございます。勇気がいったことでしたよね。私たちを信頼して話してくださって嬉しいです。よくやってこられましたね。(など、ねぎらう)

### ネガティブな発言、相手を否定する発言がでた場合

- ▶ 今のご発言に正直私もドキッとしました。いろいろな立場や見え方があるんだと思います。ここは正解をひとつに絞ったり、決めたりする場ではありませんので、議論にはしませんが、貴重な意見をありがとうございます。

### しつけと体罰を混同した発言がでた場合

- ▶ 「大きい声を出すとびっくりして泣き止むよ」、「おしりくらいは叩くことはあるよね」といった発言があったときは、できるだけその場でこのことについて、進行役から考えを伝えます。令和元年6月に国で体罰禁止が決定され、日本はこれから、体罰を用いない子育てを推進していきます。しつけのためと親が思っても身体に何らかの苦痛を引き起こしたり不快感を意図的にもたらす行為は、どんなに軽いものであっても体罰にあたる、ということが示されました。それで罰則があるということではなく、これからは、「そんなときにどうしたらいいのかを一緒に考えます」、「ともに育てましょう」というメッセージだと思ってください。ちょっと堅苦しい話になってしまいましたが、大事なことでしたのでお話をさせていただきました。

## シナリオ⑤ まとめ 10分

- ▶ みなさんのお話を伺っているうちに、そろそろ終わりの時間となってしまいました。あつという間の60分でしたね。みなさんどうでしたか。自分のことを話すのって、ちょっと緊張しますよね。でもここにいらっしゃるみなさんがお互いを尊重してくださったおかげでいい場になったと思います。ありがとうございました。最後にみなさんから、おひとりずつ1分程度で今のお気持ちをお話いただいていいですか？

## こんな時はどうする？

## 感想の内容が否定的、悲観的なものであった場合

- ▶ ありがとうございます。新たな気づきが出てきたということですね。子育てって、魔法の杖のように一瞬にして解決することは少ないし、終わりなき旅のように思いますが、旅に仲間がいればそれも励みになんとかやっていけるのではないのでしょうか。ぜひ、引き続き、こういった場に限らず、〇〇さんへ今日のみなさんで声をかけあっていけるといいなと思っています。もちろん、お互いに！

## 解説⑤

誰かが長く話してしまうと、つられて皆が長くなりがちです。1分を超えて話す人がいた場合は、そのお話の継ぎ目で進行役が「ありがとうございました。それでは次に」と入ることもできます。または話の終わりを待って、「1人1分程度でお願いします」を繰り返してから次の人に回すようにするとよいでしょう。

世界で初めて子どもの体罰を禁止する法律の制定につながったエピソード

『暴力は絶対だめ！』の戒の石<sup>いましめ</sup>

童話「長くつ下のピッピ」の作者リンドグリーンが、  
1978年にドイツ書店協会平和賞受賞式で行なったスピーチ

「ある高齢の女性が打ち明けてくださいました…むちを惜しむと子どもはだめになると信じられていた頃…よくないことをした小さな息子にむちを探してくるように言いつけました。長い間帰ってきませんでした。ついに泣きながら帰ってきた息子は「ぼくはむちを見つけられなかったけど、母さんがぼくに投げつけられる石を見つけたよ。」彼女は突然、息子の目にすべてを読み取りました…ふたりはしばらく一緒に泣きました。その後、石は「暴力は絶対だめ！」を覚えておくため台所にずっと置かれました。

物事を解決するには暴力以外の別の方法があることをわたくしたちはまずは自分の家庭で、お手本として示さなくてはならないのです。そうすることで、もしかすると少しずつではあっても世界に貢献できるかもしれません。」

『暴力は絶対だめ！』リンドグリーン著・石井登志子訳より引用

このスピーチは世論を動かし、スウェーデンでは世界で初めて子どもへの体罰を禁止する法律の制定につながり、日本を含め50か国以上が制定している。

シナリオ ⑥

進行役からの一言と連絡 12分

▶今日はみなさんご参加ありがとうございました。  
 少しの時間でしたが、お互いのことを知ったりすることでホッとできることがあったのではないかなと思います。自分のことを話すのは勇気がいることだったかもしれませんが、自分の経験が誰かの参考になるって嬉しいですね。

「話す」ことは、自分から取り出す「放す」ことでもあり、ちょっと客観的になれる効果もあります。また機会がありましたら、こうして誰かに話してみるといいですね。  
 今日話していく中で ご自身のことについて何らかの「気づき」があった人もいるかもしれませんが。「気づき」は全て大切なもので、正しいとか悪いというものではなく全て尊重します。

このまま家に帰るのはどうも・・・という人はこのあと個別にお話をお聞きすることもできますから遠慮なく声をかけてくださいね。  
 子育てってすぐに解決するようなことばかりではないですが、仲間がいると思うと頑張れることもあるし、逆に頑張らなくていいんだとホッとすることもありますよね。私たちもいつでもお待ちしております。ぜひまたお話ししましょうね。

改めてですが、今日ここで話されたことは誰かに話したり、発信することはお控えくださいね。お互いに守られていることで、安心してお話できる場ができました。  
 ご自分とみなさんに向けてエールをこめて、拍手して終わりたいと思います。  
 お疲れ様でした!!!

このあと、この場所は〇時まで使えるようにしてあります。ちょっとお名残り惜しいですね。赤ちゃんのお世話や情報交換などの時間としてお使いくださいね。私たちも残っていますので、お声かけさせてくださいね。

(もしくは、)  
 少しお名残り惜しいと思いますので、この後は〇〇の場所が引き続き使えるのでみなさんいったん荷物をまとめて、移動しませんか?連絡先の交換などもぜひおすすめですよ。

解説⑥

まとめを聞いてフォローが必要な場合は上記のように簡単に触れておきましょう。

改めて、ここで話されたことはお互いに守られていること、勝手に他言することのないように伝えます。最後にお知らせや、この後の必要な連絡があれば伝え、終了します。また、終了後に参加者に個別に声をかけて、感想を聞くようにします。

そのため会場は時間に余裕をもって準備しておきます。終了後、参加者同士が話しながら帰る用意をしたり、スタッフが気にかかった参加者に声をかけたりするためにも、リラックスできる雰囲気をつくっておくといでしょう。感情が揺れた様子が見て取れた参加者には

必ず声を掛けます。言い過ぎてしまったと感じると拠点の利用から足が遠のいてしまう場合があります。「話してくれたというその行為が大切だった」「他の人にとって話しやすくなった」など、その人が感情を表現したことを尊重する視点から話しかけましょう。

参加者のほうから話しかけてくる場合もあります。プログラムの中で、自身の過去の辛い体験等、「蓋をしていたこと」に気がつく人もいます。まずは「お話をくださってありがとうございます。私たちに信頼して話してくださいって嬉しいです」と伝え、「よくやってこられたね」などと、ねぎらいます。お話を聴き、気持ちを向うことがなにより大切です。

## 利用者が少ない拠点で実施する

少子化が進行している地域ではもともとの利用者数も少なく、講習などを企画しても参加者が集まらないのではという心配があるかもしれません。「予防型プログラム実践モデル」は、参加者が少人数でも実施できます。

当日の参加が1、2名と少数だった場合は、以下のようにアレンジして実施することが考えられます。（3人以上の参加者があった場合は、「予防型プログラム 実践モデル」に沿ってそのままの実施が可能です。）

### 参加者1、2名の場合の実施方法

- ① シナリオ①の「はじめの挨拶とグラドルール」をそのまま行います。
- ② 以下のワークシートを印刷して参加者に渡し、記入してもらいます。時間は10分程度。その間スタッフは子どもを見守り、参加者が安心して落ち着いて記入できるように留意します。
- ③ 記入後、参加者2名の場合はワークシートを交換して読み合ってもらいます。1名の場合は、進行役のスタッフが読みます。
- ④ 参加者2名の場合は、ワークシートの項目順に、それぞれの記述についての感想を参加者同士で語っていく形で進行していきます。  
参加者1名の場合は、進行役が、参加者に対して項目順に記入した感想を聞いた質問していきます。
- ⑤ 少人数の場合、進行役は参加者から疑問への正解や解決方法を求められることが多くなると思われます。しかし、あくまで参加者本人がひとまず考えてみるのが大切です。
- ⑥ 参加者が少ないと、互いの話からヒントを得て自分の問題の解決方法に自ら気が付くことが難しくなります。進行役がその代わりとして、ヒントとなる話をする必要が出てくる場合もあるでしょう。その際は進行役が回答者にならないように気を付けましょう。

### 予防型プログラム 実践モデル 少人数実施用シート

#### 「夜泣き」どうしてますか？

1	今の我が家の「夜泣き」の様子はこんなです	
2	「夜泣き」で、私が困ってしまうのはこんなことです	
3	「夜泣き」で困ったときには、我が家ではこうしています	
4	「夜泣き」が起きないのはこんなときかも	
5	「夜泣き」が起きてても、困らなかったのはこんなときでした	



利用者の日々の様子から必要を感じたテーマをもとに、達成したいねらいをもって実施されたプログラムからは、今後の支援のヒントとなる多くの成果を得ることができます。

「予防型プログラム 実践モデル」の実施から得たことを拠点での日々の活動に反映していく方法や利用者への予防的かかわりなどについて考えてみましょう。

● 終了直後の振り返り

● スタッフ間で共有

● 利用者への対応に活用

● 日常の拠点の活動に活用

## ● 終了直後の振り返り

プログラム終了直後にスタッフの振り返りを行なうのは重要です。

設定したねらいは実現できたのか、参加者は気づきを得られたのかを確かめます。

できれば、当日かかわったスタッフ全員によって振り返りの時間を持つことが望まれます。一時保育が行われた場合はその担当者も参加してもらいます。

各自が自分の役割から感じたことを語り、その内容を記録に残しておきます。運営上の実務的な問題点だけでなく、参加者の反応はもちろん、スタッフ自身の気づきや感想も語られ、記録されることが大切です。

振り返りでは、参加者の様子も共有します。

日頃から気になっていた利用者が参加していた場合、プログラムで何が語られどのような様子であったのかをスタッフで共有し、次回利用時からのサポートについて話し合います。

またプログラムの中で新たに気づいた支援を必要としている利用者に関しても話し合い、対応を協議します。

## ● スタッフ間で共有

複数のスタッフがいる拠点の場合は、終了直後の振り返りの他に、後日、スタッフが全員参加するミーティングなどでプログラム実施の様子を共有し、日常の活動に活かしていきます。

## ● 利用者への対応に活用

プログラムに参加した利用者が突然泣き出してしまったり、いきなり自分の被虐待体験を語ったりするような場合も予想されます。

プログラム中の対応についてはシナリオ④をご覧ください。ここではプログラム中の発言や様子が気にかかった利用者や拠点の中でどのようにかかわっていくのかを考えていきます。

まずはプログラム終了直後、拠点に移る前に会場となった場所でその利用者や個別に話をし、利用者や子どもの家庭での安全を確認しておきましょう。

「先ほど泣いていたのが気になって。どうされましたか？」

などと率直に話しかけ、相手の様子を見ながらプログラム中の言動はなぜ起こったのかの原因を知ろうとしていきます。

ここで確認が必要なことは、以下の3点です。

### 1. 親が何らかの追い詰められた状態にいないか

(育児ストレス、親の精神疾患、家庭不和、経済的な問題などが隠れている場合もあります。)

### 2. 親や子に、外部からの支援が必要なのではないか、または既にどこかの機関がかかっているのか。

### 3. 家庭内で子どもへの虐待の恐れはないのか

(父親等、ほかの家族からの虐待含む)

どんな事情なのかはなかなかわからない場合もあります。

気を付けながら話を聞きますが、尋問や詰問の口調にならないように注意が必要です。話したくない様子の時は無理に聞き出そうとせず、「また遊びに来てね」と次回の利用につながる形で別れます。

ただし、虐待の恐れがある場合や母の精神状態がよくなかった場合は、市町村の担当課にその旨を早急に連絡しておきましょう。拠点には、虐待に気が付いた場合の対応についてのマニュアルがあると思います。それに従って行動しましょう。

もし定めていない場合は、この機会に市町村の拠点担当者に確認しておきます。また日ごろから、市町村の地区担当の保健師や要保護児童対策地域協議会などと連携しておくことも大切です。

プログラムの中で気になった参加者については、その後も拠点を利用し続けることがほとんどです。

終了直後に話をしてもスタッフの不安が解決できなかった場合に、後日、こちらからプログラム中の言動をさかのぼって尋ねるのは難しいことです。ひとまずは日常会話を心がけ、他の利用者と同じ対応になるように気を付けます。

何より大事にしたいことは、利用者にとって拠点が「遊びに来続けられる場」であることです。地域の居場所を失ってしまうことのないように対応には細心の注意が必要です。

利用者の方から、プログラムの話題に触れてくるなどの場合は話を続けていきます。しばらく期間を開けてから利用者の方から話してくれることもあります。



## ● 日常の拠点の活動に活用

プログラムを実践していく中で、利用者の様々な思いや個別のニーズを知ることができます。それを日々の拠点の基本4事業（①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談、援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施 月1回以上）を軸とした活動に反映していくことで、より利用者にとって身近で頼りになる拠点となっていきます。「予防型プログラム 実践モデル」実施後に、スタッフが以下の気づきを得たと仮定し、4事業への反映を考えてみましょう。

### スタッフが得た気づき（仮定）

- ◆ 子どもが夜泣きするのは母親の責任だととらえている父親が一定数いる様子だった。
- ◆ 夜泣きはもちろんのこと育児や家事に夫の協力を得られず、睡眠不足で憔悴している利用者がいた。
- ◆ 「夜泣き」のテーマにさほどの興味はなかったが、誰かと話をしたいために参加した利用者がいた。

以上を基本4事業にそって活動に反映していく一例を示します。

### ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進

スタッフが話し相手を必要と感じた参加者が拠点を利用した際に、月齢が近い子どもを育てている利用者としりげなくつなぐ。

### ②子育て等に関する相談、援助の実施

夫の家庭での様子にスタッフが不安を感じた参加者に対して、話を聞いてもらう先として折を見て女性相談等を紹介する。

### ③地域の子育て関連情報の提供

母親のリフレッシュのために一時預かり事業やファミリー・サポート・センター事業を使えることをPRする。夜泣きで疲れ切っている場合に利用することで、母親の気力・体力の回復につながることや、そのためにも利用できることをわかりやすく伝える内容のポスター等を作って拠点に掲示する。

### ④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施（月1回以上）

夫に向けて、夜泣きについて正しい認識を得て母親とともに対応していくことができる知識を持つための講習を企画する。

# グループワークの意義

武庫川女子大学 教授 倉石 哲也



本来共同で行うべき子育てが、現代社会で子育ては孤独な作業となりました。さらに現代の子育て世代は「自己責任」や「自立」という言葉に晒されています。子育てを頼ることは自分に力がない「恥ずかしい」といった意識を抱きかねません。情報にアクセスしやすく自己解決の習慣が身につくと、人に頼ることに「煩わしさ」を感じる人もいるでしょう。現代社会は、子育て世代を孤独に追い込む装置が構造的に働いているともいえるのです。

その中で、子育て支援拠点の果たす役割は極めて重要になっています。他者と交わり、孤独から解放される心地よさ、安心できる居場所の確保、頼るべき存在の確保は親の緊張を解きます。緊張から解かれると子どもへの感受性や応答性が高まり、親として成長素地ができるのです。

同類の体験をしている親同士が共通の話題について、安心できる場で自由に話し合う機会は、自分を解放させ、自己の力に気づく大きなチャンスになります。

グループワークの基本原則は ①個別化、②参加と制限、③葛藤解決などがあります。一人一人が大切にされているという関係と共に、支援者との安心できる二者関係があることが前提です。発言は促され、保障されます。もちろん発言しないという自由も保障されますが、積極的に他者の発言に耳を傾け、共感的な態度が持てるように支援を受けます。参加者間で意見が異なる場合には、支援者の仲介も含め、落としどころを見つけて解決に進むことが求められます。これらの参加者に求められる簡単な原則は、支援者の支援によって実現するのです。

安心・安全なグループの話し合いの場に参加することで、次に生まれる段階は相互支援体験です。発言が支えられ、発言を支えるという体験が、支えられる実感と他者を支える実感とに合わせり、自己の能力に自信を回復させるようになります。

支援者は、原則に則ったメンバーとメンバーの関係を視野にかかわる必要があります。

一つには、一人一人が体験していることに敏感になり、それぞれの体験を個別的に共有できるように心がけましょう。

二つには、「波長合わせ」。グループの雰囲気大切にします。グループは盛り上がりよというものではありません。笑いは時に‘ごまかし’であり‘拒否’のために発せられることがあります。笑いによって肝心なテーマが進みにくい場合には、その雰囲気に合わせるだけでなく、話ができそうな人からやさしく話題を向けなければなりません。逆に盛り上がらない場合に過度に心配する必要はありません。個別化の原則で一人一人の話を丁寧に傾聴するという姿勢を心掛ければよいのです。

三つには、グループの雰囲気に合わせることに、個別の雰囲気をキャッチすることです。楽しい話をしているときに、静かな態度は気になりますが、その態度を許容し、話を振ることで本人が体験している感情や思いを言語化してもらうとよいでしょう。

四つには、支援者は「限定した言い回し」を心掛けることです。特に、助言や体験談を求められた時には、支援者としての意見を述べる場合もあるでしょう。‘私の場合は’‘今までのお話を聞く限りは’‘(本や人物をあげて) ○○によれば’と「限定」した意見であることを柔らかく強調することです。

グループワークを実践するのはだれしも緊張するものです(緊張しない人はいないと思ってください)。大切なのは一人一人の考えと、グループで体験したことを大切に支えること。人と人をつなぐような橋渡しの役割を心掛けることです。

よい準備をすればよい結果が返ってきます。

皆さんの試みで、現代社会の孤独な育児が払しょくされることを期待しています。

予防型プログラムを拠点で実施することで、利用者同士の支え合いを育むと同時に、利用者自らが、「自分自身でなんとかやっつけていけそう」と自信を深めていくことが期待されます。ここでは、「予防型プログラム 実践モデル」の展開編としての実践例を以下に紹介します。

## ● 「予防型プログラム 実践モデル」をテーマを変えて展開する

地域子育て支援拠点基本4事業の中で、子育て及び子育て支援に関する講習等は月1回以上の実施が求められています。

「予防型プログラム 実践モデル」は、利用者ニーズを拾いながら毎月のテーマ設定をしていくことも可能です。プログラムを行っている中で参加者やその家庭の隠れたニーズにスタッフが気付いた場合、そのニーズをもとに新たにプログラムを企画し自然な形で参加を促していくことも考えられます。

ひとりの人のためにと行ったパーソナルな支援が結果的に他の人たちにとって役立つユニバーサル支援となっていくこともあります。

### テーマの展開例

- ◆ 子どもの食事、おっぱいやミルク…誰もが入りやすいテーマです。
- ◆ 「帰省」 どうしてます?…お盆、お正月が近づくと不安になる親が増えます。
- ◆ 人見知り…普段とは違う人に出会う機会が多い時期に悩みが増えます。
- ◆ 泣き止まないとき…虐待事例が語られやすいテーマであることへの配慮が必要です。
- ◆ パパに伝えたいこと…家族関係を語ってみましょう。
- ◆ 祖父母と子ども…義理の親との関係性も問題になりがちです。
- ◆ 「いや!」とお付き合い…子どもをテーマにすると安心して語れる人もいます。
- ◆ しつこくていつから?…乳児の親が対象でも今後のことを考えられます。
- ◆ 子育てと家事…永遠のテーマですが、子育てを始めたばかりの人にとって切実です。
- ◆ ママの職場復帰…入園手続きがはじまるころ心が揺れる場合もあります。
- ◆ ママの「いらいら」…価値観が分かれやすいので丁寧なファシリテートが必要です。

## ● 「親としての成長に関するテーマ」を活用する

平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告レポート「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」で行われた聞き取り調査から、地域子育て支援拠点の利用者の「親としての成長」は、「エンパワメント」「交流の広がり・深まり」「自己有用・有能感」の3つの側面と、右ページの13のカテゴリー(図)が示されました。

拠点利用開始当初の不安を含んだ親の気持ちと行動、拠点を積極的に利用するようになった親の気持ちや行動を想像しながら全体を見ると、独立している13のカテゴリーは一連の繋がりと捉えられ、このカテゴリーの中から、「親としての成長」をテーマにして深めていくこともできます。また、予防型プログラムの実施が、拠点における「寄り添い型支援」の具体的実践例と位置づけることもできます。

### 地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」

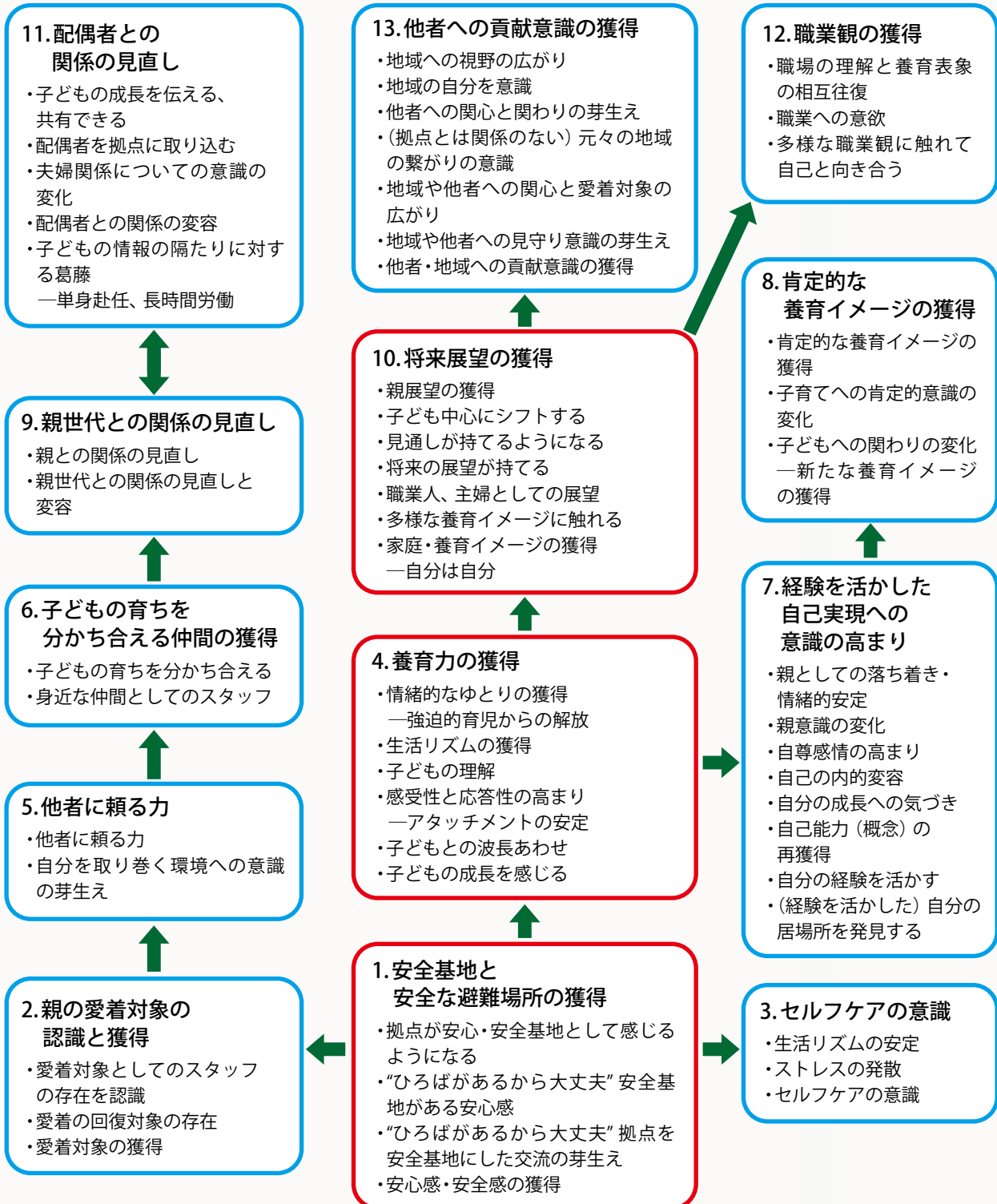
地域子育て支援拠点という場を使いながら、ピア及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖をつくることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動。

### 地域子育て支援拠点における「親としての成長」

親が、日々の子育てや子育てで生じた葛藤や困難に向き合う中で、自らのこれまでの経験を活かしつつ、力添えを受入れたり、必要に応じて他者に頼るなど、子育てに関する自己決定の経験を通して、わが子への感受性や応答性を高めること。また、こうした経験を通して、わが子以外の子どもの存在に気づき、共に養育に関わろうと認識し、行動しようとするプロセスである。

## 「親としての成長」概念図

作成：倉石哲也



### 基本 4 事業の「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施（月 1 回以上）」を充実させていく

予防型プログラムは、利用者のニーズを反映して開催しやすく大変手軽に実施できます。そのため「おしゃべり会」などの名称を付け、年間計画の中に組み込んで定期的に開催している地域子育て支援拠点も多数あります。隔週で何曜日に開催するなど枠組みを決めておき、テーマは利用者のニーズにそってフレキシブルに決定していくことも可能です。

定期開催が決まっていると、広報も簡単ですし、参加者も予定を立てやすく参加しやすくなります。

本来、基本 4 事業に定められた「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施（月 1 回以上）」は、対象を母親や子どもには限っていません。予防型プログラムを順調に開催し、振り返りを行い記録を残していくと、利用者の傾向や地域が抱える課題が浮かび上がってきます。その課題に応じて、父親、祖父母、地域の人達をも対象とした講習を行うなどの充実が期待されます。

少子化が進行する中でも乳幼児を育てる家庭を地域で孤立させない、地域で支えるといった地域子育て支援拠点に期待されている役割は、講習等の実施の中でも果たしていくことができるのです。

#### 6月

<予防型プログラムを「おしゃべり会」として毎月の活動に反映させた例>

月	火	水	木	金	土	日
1 ベビーの日 13時～15時	2	3	4 相談日	5	6	7 お休み
8 ベビーの日 13時～15時	9	10	11 ◆おしゃべり会	12	13	14 お休み
15 お休み	16	17	18 相談日	19	20	21 お休み
22 ベビーの日 13時～15時	23	24	25 ◆おしゃべり会	26	27	28 お休み
29 ベビーの日 13時～15時	30 おたんじょう会	◆おしゃべり会 11日(木)、25日(木) 10:00～12:00 赤ちゃんとお母さんのためのおしゃべり会です。 赤ちゃんを囲んで子育ての話などゆっくりしてみませんか？ 0歳を過ぎた赤ちゃんママの体験談も大歓迎です。 (話題例：体温調節、寝かしつけ、お風呂での工夫)				

平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「地域子育て支援拠点の寄り添い型支援が親の成長を促すプロセス分析と支援者の役割に関する調査研究」では、地域子育て支援拠点における「寄り添い型支援」を、「拠点という場を使いながら、利用者相互及び支援者との相互作用を活用し、受容の連鎖を作ることを通して、親と支援者が、共に相互にエンパワメントし合う活動」と定義しています。

予防型プログラムを定期的に開催し、その成果を活用していくことが、やがて地域子育て支援拠点の寄り添い型支援の質の向上へとつながっていくのです。

それは、結果として支援者である拠点スタッフの成長をもたらし、利用者である「親としての成長」に大きく寄与していくことが期待されます。

## あ と が き

私たちスタッフは、利用者から寄せられる「問い」に対して、「答え」を示すような関係性というよりは、一緒に考える存在として役割を果たし、自己決定に寄り添う存在でありたいと考えます。同じ悩みを持つ保護者同士がお互いに語り合う中で、わが子にあったやり方を考え、模索していくということは子育てを継続していくうえで必要なプロセスであり、誰にも保障されてほしい環境です。最終的に悩みながらも利用者自身が導き出した意思決定を尊重することが、親自身の力となり親子関係にも良い影響を与えるものと考えます。

親子が精神的に厳しい状況に追い込まれてから相談につながるのを待つのではなく、日常のひろば活動の中で、個々のつぶやきや会話からニーズや課題を拾い、他の利用者にも同じようなニーズや悩みがきつとあるだろうと想像し、それをスタッフ含め利用者同士で考えていくといった体制づくりが必要です。親の「今」を受け止め、その主体性を活用して潜在力を発揮してもらえれば、地域子育て支援拠点は真に「予防型」と呼ばれることになるのではないのでしょうか。

本手引書は、これまでの実践現場で行われてきた利用者向けのプログラムを振り返り、これまでの調査研究を参考にしながら、実践者の視点に基づき作成しています。是非、地域子育て支援拠点事業における、4つの基本事業の一つである「講座・講習等の実施」を活用し、「予防型プログラム実践モデル」を実施してみてください。また、その結果も教えていただきながら、この手法をより進化させていきたいと思っています。本手引書が皆様に活用され、地域子育て支援拠点の質的向上に生かされ、子育て家庭の最善の利益につながることを願ってやみません。

最後に、「グループワークの意義」についてご寄稿いただきました、武庫川女子大学教授の倉石哲也先生に心より感謝を申し上げます。

また、本手引書は「住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト助成事業」として発行することができました。子どもと子育て家庭への日頃からのご支援に、心より御礼申し上げます。

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

奥山千鶴子

中條美奈子

松田 妙子

安田 典子

(五十音順)

子育てひろば全国連絡協議会（通称：ひろば全協）は、妊娠、出産、乳幼児期の子育て家庭の拠り所となる子育てひろば（地域子育て支援拠点事業等）の質を確保し、普及・促進するための活動を行っている全国組織の中間支援NPO法人です。



Memo

## 予防型プログラム（講座・講習）

－地域子育て支援拠点職員が実施するための手引－

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会

〒222-0037 横浜市港北区大倉山1-12-18-303

TEL:045-531-2888/045-546-9970 FAX:045-512-4971

MAIL:info@kosodatehiroba.com HP:https://kosodatehiroba.com

※この冊子は「住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト」の助成金により作成しました